詩と絵とこころ

松生　歩 Ayumu Matsuike
（画家、京都造形芸術大学芸術学部教授）

詩や絵が生まれるとき

私は絵を描いている。

一応日本画というジャンルにいる者として位置づけられているのだが、ふだん自分が日本画家だということを意識することはほとんどない。使っている画材が岩絵具なのは、確かに日本画の証のようにも思えるが、洋画家が岩絵具を使ったって何の問題も生じないのだから、画材だけがジャンル分けの決定打というのも不自然である。

他の人から見てどう映るのかは自分ではよくわからないが、「日本画」ということではなく、「日本の昔からの絵画表現」の中で、私が共感し馴染んでいるものに、絵巻や南画のような、物語や詩と一体になった表現があるのは確かである。

私はたいていの場合、自作の詩や物語と連動した絵画作品を発表してきた。実際に絵と並べて文章も展示することが多いのだが、絵だけを展示している場合でも、自分の中では必ず作品の中に詩があった。そもそも作品のイメージが浮かんでくる時、映画のように言葉と映像が同時に出てくるので、切り離しようがなかったからである。

私は自分で言うのも変かもしれないが、いたって生真面目で堅物で苦労性・貧乏性で、依怙地に自分を苛めてやたら卑屈に頑張る性格である。しかもその頑張りがたいてい空振りの連続で、何の成果もなくいつも汲々としている、かなり無能な人間である。

しかし、どういうわけか絵や詩の発想だけは、机に向かって頑張ったことがない。というより、頑張ったら絶対浮かばない。机に向かっては何も見えたことがない。

見えるのはまったく別の状態の時だ。けれどだからと言って、絵や詩を書くのが楽なわけでも上手いわけでもなく、いつもいつも苦労している。100 枚の絵を描けば 100 枚ともどん底の駄作で、自分はこの世にいる資格のない人間だとさえ思い詰める。けれど、200 枚目か 300 枚目に突然、「勝手に出来上がる」という事態が訪れたりする。

その時だけが、本当に「絵が生まれた」ということなのであろう。「自分が描いた」のは本当の絵ではないのだ。けれども、描いて描いて描いて、気が遠くなるほど苦しむプロセスの中でしか、「生まれる」という事件は起きてくれない。

では、詩や絵が生まれるとは、一体どんなことなのか、自己を振り返りつつ、考えてみたい。

頭の中の言葉

人間の頭の中には絶えず言葉が氾濫している。子供はいったいいつごろから、自分のこころに浮かんだ思いを言葉で反芻し始めるのだろう。気がついたら、ものを言葉で考えるようになっている。おかげで気を許すと、頭の中はしょっちゅう雑音だらけになる。嫌なことがあったとき、苦痛から逃れたいとき、逆に楽しい予感がするときも、私たちは頭の中で休みなくせりふをつぶやき続ける。感情が高ぶってくると、自分でも止めようのないくらいすさまじい勢いで言葉が押し寄せては流れ去ってゆく。自分の考え出したせりふに追い立てられるように、次々と思考が生まれて変遷し、いつの間にか自分の言葉で自分の感情をさらにあおり続けていることに気づいたりする。

しかし、この場合の言葉はいうなれば「ゴミ」だ。そこにはまったく真理はない。

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』から「天気輪の丘」松生歩、2006 年

言葉の力

言葉というものはおそろしい。口に出してしまえば、周囲の者の感情や、自分の置かれた状況を確実に変化させる。また、口に出さなくとも、自分のこころの中でつぶやいた言葉は確実に自分の脳に働きかけ、自分の行動と運命を変化させてしまう。なぜ、言葉にはそんな力があるのだろう。

もちろん、数え切れないほどの理由と由来とデータがあるはずだが、今、日常自分が感じている言葉の力を 3 つだけ挙げるとすれば、1 つは「音としての力」、もう 1 つは「感情と結びついたときの力」、さらに「魂から降りてくる力」がある。

まず、「音としての力」であるが、私は言語学にも宗教にもまったく知識のない身であるが、言葉に「音」としての力があるということは感じている。特に母音には何か身体に及ぼす規則的な力があるように思う。音とは、振動とか、周波数と言い換えてもいいかもしれない。人間の言語に限らずとも、動物の鳴き声でも、木の葉のざわめきでも、波の音でも、人間には聞き取れないイルカやコウモリの発する音でも、何がしかの影響を人に与える。また、人間の奏でる音楽や、優しい語りかけが、動植物の育ち方に影響を及ぼしたりもする。どんな物も固有の波長を持っていて、お互いに影響を与え合っているのが世界の姿なのかもしれない。その中で、言葉は「音」としてだけでなく、「意味」をも持つものであるから、影響力はさらに大きいといえるだろう。

次に「感情と結びついたときの力」は、さらにもっと強力である。喜怒哀楽のそれぞれの場面で、人はさまざまな言葉を発するが、特に怒りの感情が言葉となって発せられたとき、その言葉が相手を傷つける力には恐ろしいものがある。プラスの感情、愛のある感情から出てくる言葉には、相手を励ましたり高揚させたり、暖かな波動で包み込む力があるが、マイナスの感情から発せられる言葉は、相手を暗い闇に引きずりこんでしまう強力なパワーがある。感情から発する言葉には、明らかに目に見える形で相手を変えてしまう力があるのだ。それゆえ、人は自分の発する言葉に注意を払い、責任を持つべきであろう。

ところで、本稿で扱いたかったのは、最後の「魂から降りてくる力」としての言葉である。

降りてくるということ

言葉はこころの中に生まれる。正確には脳の中に生まれると言った方がいいのかもしれない。前述の「ゴミ」と称したこころの中の雑音は、表層意識の中を漂っている無常な存在である。感情に由来して派生してくる言葉の多くは、この類であると思う。

一方、「降りてくる」言葉は、自分の頭で能動的に作り出したものではない。それはおそらく深い潜在意識の中から、ある条件の下に浮かび上がってくるもののような気がするのである。

人はふだん衣服を身にまとうように、こころにも感情という衣をまとって生活している。親切で優しい人でも、一皮剥けばこころの中にはどろどろしたものが蠢いているもの

だ。その方が人間らしいとも言えるし、だからこそ詩や絵も、ただ綺麗なだけのものは嘘臭い。

暗く、グロテスクなものの方がリアリティが感じられ、それこそ本物の芸術だと時に評判になったりもする。

しかし、そんなに単純なものだろうか？　確かに、一皮剥けば人間は汚い。隠していた感情があらわになるから。しかし、潜在意識の底に向かって、すべての感情を剥いて剥いて剥いて、どこまでも剥き続けてゆけばどうなるだろう。そこに現れるのは透明な光のような存在ではないだろうか。

徹底的に自我の衣を脱ぎ捨てたら、最後には自他の区別も必要がなくなる。区別は自分が安心を手に入れようとして、逆に恐怖に駆られて作り出していたものに過ぎないとわかるから。区別が自ずから消滅したとき、そこで初めて人は限りない自由を手に入れる。

その境地にいるとき、すべての存在物の波動が伝わってくる。見えるもの、見えないもののすべてに自分が見守られている実感に感謝があふれ、音にならない音を聞き、見えないものを見ている感覚がある。自分はただただ透明で、木とも水とも風とも、遠い宇宙とも結び合っている。

その時、言葉が降りてくる。

言葉と共にビジョンがあらわれる。

私には感知できないけれど、音に敏感な人なら、そのとき映像ではなく音楽が生まれてくるはずだ。また別の人は踊りたくなるかもしれない。

芸術の始まり

ビッグバンの話を聞くたび、それならビッグバンの前の宇宙はどうなっていたのかと不思議に思うのは誰しもに共通した思いではないだろうか。私たちは今、生命の進化の枝分かれの先端として生きているけれど、枝から幹へ、幹から根へ、根から地球へ、地球から銀河へ、銀河から宇宙へ、宇宙からその先へと思いを馳せるたびに、枝分かれしていた意識が大元に向かって太く一元化してゆく。その源には何があるのだろう。私たちの正体とは何か。

頭で考えてもわからないけれど、私たちのDNAと潜在意識には、それが刷り込まれているはずだ。そして、生命が成長を欲して止まない理由も、結局は進化の螺旋を上昇することで自らの出自を思い出し、帰還したいという願望からのような気がするのである。

その願望は、きっと大昔から、祈りや表現活動と結びついてきただろう。「降りてくる」何かを、人々はさまざまな方法で表現しただろうし、それを皆で共有しただろう。その中で自己と他者との境界がなくなる体験をも共有できたであろう。そんなことが芸術・芸能の始まりだったような気がする。

詩と絵とこころ

真理に少しでも近づく、あるいは近づきたいと願う純粋な意識が表れた詩や絵が、数万行に1行、数千枚に1枚しか創り出せなかったとしても、こころに「降りてくる」ものを待ち続けて創作に打ち込むことは幸福である。大変な苦労に満ちた幸福である。そしてまた、そのような様々な芸術に触れ、こころで味わうこともまた、大きな幸福である。ただしこの場合の「こころ」には汚れた感情を廃した、静かな水面のような状態がふさわしい。

仮に、私たちの生命が、例えば永遠とか宇宙の本体と思われるくらいの、ある大きな「ひとつのもの」の細胞のような位置づけだと想像してみれば、ある細胞はものを作り、ある細胞は作られたものを味わうことで追体験し、両者は常に感動の波長を共有する。そしてその波長は本体の「ひとつのもの」と同調して常に美しい響きを奏でる。そしてまた、「ひとつのもの」からも常に響きは細胞に届けられる……。

このような想像は、無意味なことであろうか。「絵は自分のために描く」のが正論のように言われたものだが、私にはずっとしっくり来なかった。「他者のために描く」というのもおこがましいことだ。「芸術のため」というのも格好をつけすぎているように感じる。絵は、私たち存在物のすべての根底に流れている何かに向かって、その融合のために描いているように、私には思える。

そしてそれは、音楽や文学、舞踏を始め、すべての芸術に共通していることのように感じるのである。

「気配」松生歩、2005年

「午後の慈光」松生歩、1983年

「すばるへ　そしていのちのために
わたしたちがえがいてきたもの
わたしたちがいのってきたこと」
松生歩、2009年